
お嬢様初体験

水守中也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お嬢様初体験

【著者名】

水守中也

N9325M

【あらすじ】

お父様がおっしゃっていました。

「西園寺家人間たるもの、つねに本物を知らなくてはならない」と。

(**温****馨****モ**)

口頭傳達せり。されど其の如きは、あしからず。

お父様があつしゃつておりました。

「西園寺家人間たるもの、つねに本物を知らなくてはならない」と。

申し遅れました。わたくし、西園寺ゆかりと申します。
好きなことは、ぼーっとすることと、美味しいものを食べること
です。現在のマイブームは、どんぶり物です。

さて、今回は牛丼です。

お父様の言いつけに従うのなら、牛丼の本場を知らなくてはなりません。牛丼の本場、それは牛丼チーン店に他なりません。
恥ずかしながら、わたくし、あのようなお店に入ったことはござ
いません。友人の中にも行つたことがある方はおりません。

けれど今世には、インターネットなるものがございます。検索
しましたところ、牛丼屋の利用方法について語られていると思われ
るサイトがございましたので、それを参考に、ただ今より突撃させ
ていただきます。

【食券式かそうでないかの有無を確認せよ。これが重要である】

これにわたくしは、激しく同意いたしました。恥ずかしながら、
わたくしは食券方式なるものを知りません。牛丼だけで精一杯です
のに、食券とは、難易度が高すぎます。

外から何度も見て、食券方式でないことを確認して、意を決して
店内に足を踏み入れました。

緊張した面持ちで質素な自動ドアをぐぐり抜けてます。

ワイヤシャツの襟は立てないように、ネクタイの裾はご飯につから
ないよう、たてつり、がつつりと頂くのがいいでのたしなみ。牛丼チーン。
ここは、男の園。

あら、意外なことに女性一人のお客様もいらっしゃいました。きっとが高い猛者か、おかまさんなのでしょう。

「いらっしゃいますー」

カウンターの中にいらっしゃる店員さんの元気の良い声が、わたくしを迎えていただきました。

わたくしが、入り口で待つておりますと、先程の店員さんがおっしゃりました。

「空いているお好きな席にどうぞ」

そうでした。

わたくしは、一番手前の席に腰を下ろしました。

心得に、初心者はできる限り入り口側の席を選べ、と書いてありました。おそらく奥の上座は、常連さんが座るものなのでしょう。カウンター越しに店員さんがいらっしゃって、お水の入ったグラスをことりと置かれました。

一口いただきます。……あまり美味しいぞこませんね。そういうえば、お水の本場はどこになるのでしょうか?

「あの、えと、ご注文は?」

あ、いけません。本題を忘れていました。

「牛丼をお願いいたします」

「……」

な、なぜか沈黙です。なにか間違つたことをしてしまつた感じですか。

「えと、並盛りでよろしくですか」

波盛り。なんでしょう。

海鮮丼ではなんとなくわかりますが、牛丼はスマッシュの氣もいたします。

「すみません。では、そちらでよろしくお願ひいたします」

わたくしは、ぺこりと頭を下げて思い出しました。

ああ、そうでしたわ。すっかり忘れておりました。

「はー。あと……」

これは心得には書いてありませんでしたが、わたくし、知つてあります。

通の人は「つるべた」のです。

「つるべたで」

「……はい？」

「つるべたです」

「えつと……つるべた？」

「はい。つるべたでお願いします」

「……はあ」

店員さんが調理場の方々に向けて叫びました。「牛丼並盛、つるべたでー！」

「はい、牛丼並盛つゆだ つるべた？」

「……つるべたって、つゆだくの間違いだろ」

「でも、佩ただけに、つゆなしかもされませんよ」

「もしかすると愛ちゃんにたいする当てつけだつたりして」

「……殴りますよ」

「いやこれは本部が店の対応を見るためにつかわした覆面調査員と見た。腕が試されるぞ」

「はいっ！」

奥の調理場からそのようなやり取りが聞こえてまいりました。

なにやら試行錯誤されているようですが、常にその姿勢が見られるのは、素晴らしいことですね。

しばらくして牛丼が参りました。

どんぶりに並々と牛肉どこ飯が水平に乗つかつておりました。なんか想像していたのとは少し違います。さすが本場です

【あまり目立つ行動は慎むべき。ただしテーブルに置かれている物はすべて無料。使わないのはもつたいない】

わたくしはカウンターに手を伸ばして、小瓶を取りました。これは七味唐辛子のようですね。お隣は、紅ショウガです。その隣のもも入れましょう。

「あの、それドレッシング……」

まあなんてことでしょう。

職人さんが丹精を込めて作られた芸術品を汚す行為をしてしまつ

とは！

「あの、よろしかつたらお取り換えいたしますが」

「いえ。食べます。そして改めて、ご注文させていただきます」

西園寺家たる人間、食べ物を粗末にすることは許されないので。口にいたしました。職人さんには大変申し訳ございませんが、B級グルメ風で、これはこれでアリっぽいです。良さげです。

たれの甘みとドレッシングの酸味、七味唐辛子の辛さが見事に喧嘩しております。舌が混乱しているところを紅ショウガがどじめを刺します。おかげで、純粋に飯とお肉の味が楽しめました。とっても美味しいです。

完食いたしました。

「それでは改めまして、牛丼波盛つるべたで頂けますでしょうか？」

「え？ まだ食べるんですか？」

「はい」

心得には、目立たないようだと書いてありました。創作牛丼一杯食べただけで帰るなどしては、無礼な客として、店員さんの印象に残ってしまいます。

しばらくして、同じように波盛りの牛丼がまいりました。

今度は何もつけずに、いただきました。

お肉の味が広がって、たれどこの飯にマッチいたします。先程頂いたものに比べ、非常にさっぱり薄味でござります。きっと京風なの

でしょう。

とっても美味しいです。

完食いたしました。

さて、まだ一杯しかいただいておりませんが、腹八分目ともうしますし、わたくしも満足です。しばし余韻に浸りまして、お店を出ることにいたしました。

【食べ終わつたら、店員の位置を確認して席を立つこと】

ちらりと視線を向けます。

ちょうど店員さんは奥に引っ込んでいらっしゃった。カウンターにはだれもいらっしゃいません。

わたくしは立ち上がる、駆け足でお店を飛び出しました。

背後で店員さんがなにか叫んでいたようですがけれど、良く聞き取れませんでした。

【あとは、ひたすら走つて店から離れること】

最後の心得に従いまして、商店街の人混みかきわけて、走ります走ります。後ろ髪が風になびき、なんかとつても気持ちいいです。なるほど。食後の運動は大事ですよね。

それにして不思議です。これではまるで逃げているようですね。

あ、それでサイトに「食べ逃げの方法」と書かれていたのですね。わたくし、食べ逃げとはなにか、分からなかつたのですが、ようやく分かりました。納得です。

ふと思いました。

そういえば、お金はいつお支払いすればよろしいのでしょうか？あとでセバスチャンに届けさせれば、よろしくのでしょうか？

(後書き)

食い逃げは犯罪です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9325m/>

お嬢様初体験

2010年10月8日13時46分発行